

## ウクライナ避難者から教えられたこと

横山由利亜 (公益財団法人日本 Y M C A 同盟  
ウクライナ避難者支援プロジェクト責任者)

2,450 名のウクライナ人が日本での避難生活を余儀なくされている。Y M C A は昨年 3 月、戦争前から日本で暮らすウクライナ人から家族の呼び寄せの相談を受け、渡航避難支援を開始。ウクライナ、ポーランドの Y M C A と連携し、家族構成も事情も異なる 165 名 (生後 2 カ月～86 歳) を来日させてきた。ウクライナは、成人男性は徴兵制度のため国を出ることができないので、避難者の 4 分の 3 が女性、当初、多くが母子や高齢者であった。戦争が長引くにつれ、徴兵を目前に控えた 16、17 歳の少年や、「娘一人だけでも」と言って送り出される单身女性や、心身に障がいのある方、重い持病のある方なども増えている。

命からがら来日しても、そこは安住の地ではない。たとえば、ウクライナはとても教育熱心な国、IT 先進国である。世界中どこに避難していても本国の小学校から大学まで、オンラインでの授業が受けられる。午前は日本語、午後は小学校や中学に行き、夕方から深夜にかけてウクライナの授業を受ける。ハードな生活に何もかも嫌になり引きこもる子や、愛国心に走る子どももいる。学び、スポーツし、交友関係を広げながら将来の夢を膨らませる、そういうかけがえのない時間をすべて奪われ、言葉にならない憤りや寂しさを心に抱えている。

女性の社会進出が進んでおり、多くが医師、弁護士、会計士、鉄道技師、エンジニアなどキャリアを持っている。しかし日本語の壁、国家資格の規制でなかなか思うようにいかない。支援の現場にジェンダーの視点は乏しく、「日本語ができない」というだけで、職歴や希望も聞かれることなく単純労働をあてがわれ、子どものような扱いにショックを受ける人もいる。

夫や父親、親戚や友人をウクライナに残し、自分だけが安全なところにいることに罪悪感を十字架のように背負い、先行きが見えず、どう生きていけばいいのかと希望が持てなくなっている。爆撃を受けない安全な地に避難して、政府や財団から支援金や住むところを与えられても、人はそれだけでは生きられない。

戦争が普通の生活者をどうやって蝕んでいくか。まず全員が「戦争になるとは思わなかった。そしてこんなに長期化するとは…」と話す。戦争はわかりやすい形では始まらず、ひとたび始まったら、普通の生活者の人生を寸断し、進学之梦や、仕事のやりがい、コミュニティのつながり、そういったものをすべてゼロにする。また、同じ避難者同士であっても、決して一枚岩になれない。政治的な立場、出身地やロシアとのつながり、避難してきている家族構成や帰る家があるかどうかなど、猜疑心が生まれ、人びとを少しずつ分断させていく。

それでも、「キュウショク、プール、サイコウ」と小学生が話してくれ、「近所に住む人からもらった」とひな人形やみかんなどうれしそうに見せてくれる。「私たちにできることで恩返ししたい」と支援者冥利につきる場面もある。その度に、遠く1万キロ離れた日本で「先の見えないなかで人生のやり直し」を迫られた人たちにとって生きる希望や力になっているのは、国家や政治の大義、軍事の増強ではなく、日常の中での人の優しさ、共に考え、泣き、笑い歩んでくれる市井の人びとの存在であることにも気づかされる。

恵まれた平和の国の支援者として与える側であるつもりだったが、「戦争の悲惨さ」「人間の尊厳の大切さ」、そして「日本は多様な人と暮らせる社会か、国籍に関わらずやり直しができる社会か」、むしろ教えられ、気づかされたのは私のほうであった。

一日も早い平和の訪れを願いながらも、一方で長期化も見据えていかなければならず、私たちのアクションや発言が問われている。